

大陸(中支)

大正、昭和、平成と一兵士

山形県 佐藤 保

長い年月を振り返ってみますと、長くて短い年
月であったように感じます。明治三十七、八（一
九〇五）年の日露戦争に参戦した父をもつ私は、
小さいころから軍隊生活の厳しさを聞いて育ちま
した。大正十三（一九二四）年、岩手県の北上市
生まれの私は、母の話によると、友人づき合いを
していた近所の助産婦さんが、秋の栗名月のお月
様に栗などをお供えする準備に来ておられ、お供
えが終わると母の陣痛が始まり、助産婦さんの手
により安産であったと聞いております。

五歳の三月に、父の職業の関係で一家が北海道
に移転しました。小学校から青年学校まで道東で
暮しておりました。毎年八月ごろになると青年学
校の戦時訓練査閲と言うのがあり、各学校の男子
生徒が何百人も広場で各個訓練、中隊訓練、大隊
訓練、攻撃演習等を行い、管轄の連隊区などから
中佐級の将校が検閲官としてきておりました。

昭和十八（一九四三）年、大東亜戦争が始まっ
て二年目ですが、父の職業の関係で、今度は山形
県新庄市に家族が移転しました。私は青年学校研
究科在学中でしたので地元の青年学校へ転入しま
した。

青年学校では軍隊を退役した教官から軍人同等
の訓練を受け、軍隊に志願して国のために努力せ

よと、先生や役場からも声がありました。私は三男坊であり、兄二人はすでに軍隊入りしておりましたので、私は徴兵検査まで志願せずに父と銃後を守っておりました。

昭和十九年、徴兵検査で甲種合格となり、山形連隊に入営しました。ここで重機関銃隊の教育を受けましたが間もなく、中支派遣軍要員として列車で下関に到着、船で釜山港に上陸、鉄道で北支西安近くに入隊となりました。黄河のほとりで、毎日小型の飛行機が来て爆撃や機銃掃射があり身の引きしまる毎日でした。

私たちは現地に到着前、列車の中で転属の命令があり、砲兵隊に転属となって列車から下車した者は百人ぐらいと思いますが砲兵隊の各中隊に配属されました。私は野戦重砲自動車中隊に配属されました。そして駅近くの農家の作業棟のような建物で一夜を過しました。脱穀した麦わらが積んであり、それにもぐり込んで寝たのです。作戦に出るとこれが普通だと古兵から教えられたのです。

黄河のほとりを二日半ぐらい歩いて駐屯地に到着し、私たち初年兵の三十六人は先輩の古兵殿に迎えられ、祝福の声も掛けられ、軍隊生活はこんなに楽しいものかと感じました。また内地の様子などを聞かれましたが、古兵全員九州出身者であり、話の内容が分からず返答に困りました。というのは初年兵は東北人で青森、秋田、山形出身が主だったので、我々は九州弁が分からず、古兵には我々の東北弁は外人なみで全然分らんというのでした。

私は北海道育ちでしたので九州、四国、名古屋、岐阜、和歌山出身の人たちと一緒に小学校から育ちましたので話には不自由はありませんでしたし、時々両方の通訳をすることがありました。

教育が始まりますと父親から聞いた軍隊の厳しさが身にしみてきました。「すべて大きな声ではつきりと」を主眼の教育でしたので、東北弁で大声で答えると間違って受け取られ、ビンタのお見舞を受ける事もしばしばでした。中隊長は東京出

身でしたので、会食のときなど言葉の違いを説明したりして、月日がたつにつれて良く分かるようになりました。

野戦重砲は六人の操作が完璧に出来てはじめて発射の号令が掛るのですが、各人の責任が完全でなければ命中出来ないのです。四十キロ先の目標に命中する責任があるのです。六人の操作員が別々の場所でそれぞれの部署の教育を受けるのです。戦時中ですので飛行機に発見されないように場所を分散設定しての訓練です。その各個の訓練が完成近くなると、火砲に全員が集合し全体の操作が始まります。戦地の教育ですので、中隊全員の訓練は厳しいものでありました。

中国の土質は粘土に砂ですので雨が降ると畑も道もぬるぬるとすべります。自動車もスリップして進めなかつたりします。砂利は全然ないので道に敷くこともできないのです。黄河という大河があるのですが砂利はなく、いつも濁っているのです。

夜間、敵の襲撃を受けたことがありましたが、これには大砲を用いず退散させたことがありました。教官からは敵襲はいつあるか分からないという良い経験をしたと聞きました。

野戦重砲の編成は砲手、観測手、通信手、運転手とあり、観測は着弾地と大砲の中間地帯に観測機を備え、通信手は大砲から観測までを有線で布設し連絡を取ります。大砲の重量は五トン、牽引車は五トン、それに前車がありますので計十トンを越えます。最長弾道距離は四十キロで、最短距離二百メートルと言うものです。

一期の検閲が終わるまでは、初年兵全員は本当に全力でこの大砲の虜となり一心に頑張り努力しました。大砲の眼鏡と計器、分角等々の専門的訓練に頭を痛くしました。一期の検閲の日、部隊長が中隊に来て検閲をしました。当日は実弾射撃を実施しました。部隊長の前で二射目で命中の通信が来た時は部隊長からお褒めの言葉をいただいたのが忘れられません。

中隊は移動命令により貨物列車一本に全機器を積み込み上海に移動です。夜間運行です。列車は昼間は煙を止めて隠れているのですが飛行機の銃撃を受けることがありました。兵士の姿も見えないようにしているのですが、何人かの兵士の姿を見つけると何千発もの機関銃弾が雨の降るように来ます。立木とか電柱をたてに身を守ったこともありません。

北支から上海まで約一カ月かかって到着しました。上海は各国からの住民が居住している関係で戦時下の様相はなく、空襲などもなく安全地帯でした。上海で列車から全部の物資をおろし、一カ月の休暇がありました。軍人は電車は無料ですし、軍バスも要所の間を運行しており何人か連れて観光をしました。軍人になって初めての休暇でした。市内の幹線道路以外は揚子江（長江）から引いた水路（クリーク）があり、小舟に竹のさおで女も子供も買物や遊びをしていました。大きなクリークにガーデンブリッチという鉄橋がありました。

そのすぐ近くに二十四階のビルがあり驚きました。東京には八階のビルが皇居前にあり日本一と聞いていたので驚きました。

日本では自動車は音のするものであり、百メートルも二百メートルも遠くから聞えるものと思っていました。上海ではすぐ後に来た乗用車が音は全くなく、風を切ってスウーと通り抜けていく。タイヤの外側は白くホワイトタイヤでした。砂利道で大きな石に乗り上げてもボディーは上下せず、タイヤのみ上下するのにも不思議に思ったのです。北四線路、ウースン路とか立派な商店街があり、小学校低学年ぐらいの少年少女がグラスにお茶を入れ、ガラス片を蓋にして売っているのです。それを通りかかった人が買って呑んでいました。値段はいくらか分かりませんが、水屋さんに入ってかき氷を買ったら二銭でした。また月ペイという饅頭のような菓子も一個五銭でした。

当時、上海の町には交通信号はいくらもなく、インド人が頭にターバンを巻き、袖を黒と黄の線

が入った上衣を着て交通整理をしていました。街に有料トイレがあり入口で婦人が紙一枚をくれませす。志を置いて入っているようでした。

上海駅近くの兵站（宿舎）から揚子江のほとりのウースンと言う所に駐屯しました。そこは日本の会社が経営している製油所のように何百人かの社員が通勤しているように見えました。その社内の建物の中に私たち一個中隊が駐屯していました。

中隊長のお供をして上海に行った時ですが、中隊長がある住宅を訪問しました。そこには製油会社の幹部宅かと思いますが、主人は不在で奥さんがおり、中国人のコックさんがおりました。奥さんは「主人から聞いております。どうぞ」と言われ応接間に通されました。当時私は星二つの一等兵でしたので中隊長と同席をちゅうちよしていましたが、中隊長のすすめで同席しました。その家の玄関わきにはヤンチョ（人力車）があり奥さんの話によると買物はヤンチョで送り迎えしているとのことでした。主人は日本人を時々招待し、奥

さんとお話をさせたいと言っているそうです。常に中国人のコックとヤンチョを引く人以外は話し相手がいないと言っていました。

中隊長は中国に来て数年になるので日本の様子が良く分かりませんでしたので、日本の現実を知りたいといひます。奥様は手紙でのやりとりは日数もかかり最近届かないこともあるようだ、と日本の身内のことを心配している様子でした。

コックさんはいろいろの中華料理を作ってくれ、私は本場の料理を珍しく頂きました。帰りには大きな折詰まで頂いて帰りました。会社のため転勤で上海に来て生活しているのですが同胞と話すことの少ない不満があるように感じました。

上海市内観光中に、兵器を整備する日本の工場に立ち寄りすると、作業をしていた兵士に「出身はどこだ、中国にいつ来た」など内地の様子を知りたがっていました。皆さん国をはなれて国を安じている様子でした。上海市内に上海神社と書かれた神社があり立ち寄りすると、参拝していた日

本人の方々が私を見て、日本からいつきましたかと聞いてくる人が多くありました。いずれも内地の様子を心配している人たちでした。

市内では薪を釜に入れガスを発生させる代燃車のトラックを見ました。日本でも代燃車があり炭や薪で走るバスやトラックがありました。それを見ていると、どこへ行くのと聞くので上海駅と答えたら一緒に行きませんか、助手席に乗せてもらいました。聞くとドイツ人だと言うのです。ドイツは貧乏だから代燃車で仕事をしているんだと言うのです。運転席も助手席も板張りでした。お尻が痛くならないかと聞くと上海は舗装の道が多いので大丈夫、ドイツに行くとは座布団を敷くと言っていました。

またウースン駐屯中に腕時計のぜんまいが切れて時計屋に行きましたら、中国人の時計屋さんは軍隊の長い石鹼三本でいいと言われそれで修理したことがあります。

上海駅近くに一カ月ほど滞在中、貨車への荷物

の積み下ろしを見る機会がありました。てんびん棒で前後に二つの荷物をかつぎ、アルミ板を渡るその見事に驚きました。また中身は知りませんがドラム缶を二個てんびん棒で荷揚げするなど実に見事なものでした。

休暇も終わり目的の揚子江の海の出口の島に移動が始まりました。ウースン港で舟に乗せて島に渡す作戦です。何度も分隊長と島に行き、港のないう島にどこから陸揚げするかと下見をしました。舟は砂利を運ぶ舟六艘を木材で固定し、それに大砲を乗せる作戦です。大砲は五個もあります。

ウースンの岸壁に大きなクレーンがありました。何トン吊りですかと聞くと五トン吊りですと言うのです。しかし大砲を持ち込んだらうちのクレーンは古いからこれは吊れないと断るのです。それでクレーンが破損したら修理する条件で、まず陸上で吊り上げ移動してみたら舟積みすることで話し合いがつき実施しこれは成功しました。

島については海辺に持ってきた角材を並べ、

牽引車の巻き上げ機での巻き上げが成功しました。島には大砲に寸法を合せた要塞が出来ており、それに三門の大砲の据付けが終わりました。

島には守備隊がいて大砲の操作を伝授し、一週間ほど滞在しました。島からウースンに戻りましたら、羅天鎮に移動となり、移転が終了すると同時に下士官学校に入学せよとの命令で直ちに学校に入学しました。連日の猛訓練と学科の連続で大変な学生生活を送っていました。

教育期間も中盤すぎのころ、夕食後クリークのほとりで学友と雑談していると、私の中隊の古兵が「おーい！お前たちいつ帰ってくる」と問いかけるのです。返事に困っていると「戦争は負けたんだ。俺たちはもう兵隊じゃない。帰る準備をやっている。早く帰らないとおいてくぞ」と言うのです。学生は全員知りませんでした。

それから二、三日は平常通り教育があり、教官からいつときお前たちを中隊に戻すが連絡あり次第来るようにとのことでした。

中隊に帰ると全員階級章はなく、それぞれ私物を入れるリュックとか袋とかを、シートや兵器の革などで作っているのです。食糧も支給はなく、自分たちで働いて食べるのでした。

私たちはどこへ行っても借家住まいでしたので、中国の人とは仲良しでした。中国の人は日本の軍隊のいる所には匪族が来ないので安心して生活が出来るから、いつまでも駐屯していてくれと言われていました。

終戦後も羅天鎮の農家からピーナッツ掘りやサトウキビ刈り、綿の木の抜取り等を頼みに来るのです。数人で手伝いに行くと、帰りには食糧品を下さるので食事はいつも十分でした。中国の農家の人たちは、兵隊さんの力を借りて取入れ作業が早いのを喜んでいました。

また演芸会や相撲大会、詩吟大会などを行いながら帰国の日を待っていました。武装解除により軍馬を中国側に渡すのですが、中国では受け入れに困り、いつとき日本で飼育してほしいとのこと

で、その後も他の中隊では飼育していたようです。私たちの兵器類は広い野原に並べて中国側に渡しました。将校の使用した日本刀なども白い帯で何十振りもたばねて積んでありました。私たちが島に設置した大砲もそのままになっているのかと思うと実に残念に思います。

羅天鎮は上海から三十キロぐらいかと思いますが、当時は交通の便が悪く、バスも鉄道もなく、タクシーや自転車が主力のようでした。

ある日公用で上海までタクシーに乗ったら、日本人の運転手でした。「現地除隊して働いている。給料がいいので当分こちらで」と言っていました。昭和二十年の十二月の大晦日に中国の大家さんから沢山の中華料理の差し入れがあり、中隊一同感謝して頂きました。

一月中旬、移動の知らせがあり、上海の市政府の建物に集合となりました。既に中国軍に武装解除で全兵器を渡しましたので私物以外は何もなく、中国に渡した馬車を三台借り受けて私物を積み込み

み、人力で引いて市政府まで到着しました。市政府の広場で中国軍と米軍の二回の私物検査が終わりを、二泊しました。建物の回りには青竹で垣根が作られ、入口は一カ所で二十四時間中国の警察が立哨していました。

昭和二十一年五月に入り、近く帰国かまたは米国の島に連行され、一生奴隷として働くことになり、などの噂がありました。

いよいよ乗船の日になり港に行きましたら、米軍の上陸用舟艇が待っていました。船員は全員米軍兵士でした。そして船底の倉庫に押し込められたのです。みんなが南方の島行きだ奴隷だと言うのです。米軍船員は甲板にトイレを作り始めました。甲板のトイレに行くとな網の向こうからチョコレートやタバコ等を入れる兵士がおり、心やさしさが嬉しく感じられました。日本兵で英語の話せる人がこの船はどこに行くかと聞いたところ、行く先は俺たちは分らんとのことでした。

三日目の夜明けに島が見えるとの声に一同甲板

に出ますと、椰子の木があり南の島に連れてこられたものと覚悟したものでした。ところが九州出身の兵士から「あれは天草の島のようにだ」と確認され、母国だと喜びの聲が上がりました。

長崎の島々を左右に見て佐世保の軍港に入港しました。下船し九州の土を踏んだとたん「万歳！」がわきました。米兵も船上から「万歳！」をしてくれました。その船は日本兵の下船が終わるとすぐ出港しましたが、みんな「ありがとう！」と大声で叫び、手を振り感謝の意を届けました。

上陸して私物検査と消毒を米軍がしてくれました。乗船中の米軍の友情で消毒担当の兵士の怖さもなく、消毒薬が背中にたまるほどの使い方に驚きました。欲しかったら薬を上げると言うのです。粉末のDDTとか言う薬でした。

旧軍港の空家には何もなく、持参した米を拾った空缶で御飯を炊きましたが御飯と言うまでには至りませんでした。一泊して国鉄南風崎駅で乗車し、山形に向ったのですが、列車の混みようはた

だならぬもので、客車の屋根にまで乗り、機関車の前や炭水車も満員、女子供も煙で衣類も顔も煙で真黒にしていました。

私は発駅から中隊長の行李こまを預かっておりました。東京駅で中隊長と別れましたが、九州の発駅から東京まで立ちっぱなしでしたし、東北線に乗り換えても立ちっぱなしで、食糧も売っていません。郡山駅に到着すると一人の方が「兵隊さんご苦労さん、私はここで降りるからお座りなさい」と言われた時は、もうお礼も言わずに倒れ込んだようです。

四日目に山形県新庄に到着、飲まず食わずの復員旅行で、我が家に着いたときの体力はもう最低でした。家に帰るとお金があっても買えない、食うものを持っていても他人に上げられない自分。家族を守るのが精いっぱい、食品もすべて配給制度でした。

我が家では二人の兄はまだ帰っておらず、あとで入隊した私が早く帰ったのです。次男の兄は五

月、長男はお盆ごろの帰宅でした。兄二人はマリア患者であり何年も薬を飲んでいました。

【解説】

体験記筆者は、昭和十九年、山形連隊に入隊し、重機関銃の教育を受け、中支派遣軍要員として北支の西安に向かう。車中で砲兵隊に転属の命令で、野戦重砲兵自動車隊に配属となる。野戦重砲兵は特科部隊である。陸軍では歩兵部隊のほか、多くの特科部隊があり、初期の主なものには騎兵、砲兵、工兵、輜重兵などで、時代の変遷や中国戦線、南方戦線などの体験から、その内容は大いに変化している。

特に、自動車や戦車の乏しかった日本の陸軍にあつては、機動力のあつた部隊といえば騎兵しかなく、敵情を探る斥候、搜索、警戒には騎兵に頼るほかなく、騎兵がその機動力を生かして後背攪乱、敵中突破などの任務が与えられ、結果的には後年、騎兵は戦車部隊、機動部隊に変貌した。そ

して徐々に輜重兵、砲兵なども馬索引より自動車部隊が取り入れられつつあつたが、その様相は、米国と比べて極めて貧弱なものであつた。

当時、砲兵の砲は、大砲は口径一二ミリ以上のもので、徐々にその口径は大きくなり、射程も伸び、弾道にも違いが出てきている。そして各種の戦域、作戦、戦場の様相の変化によって、戦術や目的に合わせた砲兵部隊が生まれている。

このように分化した砲兵部隊は、大砲の種類によってもさらに分化し、野砲兵部隊、山砲兵部隊、そして筆者が体験した、口径一五五ミリ以上、重量八トンを超える重砲兵部隊が生まれ、それが戦場に機動させて戦闘に参加させる野戦重砲兵部隊となり、これに自動車部隊が配置されている。

この中で筆者は、中国大陸での自動車駆動の苦杯をなめ、輸送での貨車積みの労苦を語っている。また、その移動の間に北支から上海に駐屯し、欧米の自動車などの性能の差異など、当時の上海の実情を詳細に語っている。

戦後、筆者は、軍隊時代の自動車部隊での体験を生かすように、軍隊当時運転技術の教育を受けた者として交通安全協会発足と同時に会員となり、「原付許可証」から「自動二輪」「大型一種」「普通二種」「三輪車」「大型特殊」等の整備免許も持っている。

また、平成十（一九九八）年八月、第十二次最上地区文化交流訪中団員として上海、重慶視察に参加し、戦時中の思い出と共に感慨を語っているが、労苦体験としては割愛しました。そして

「若き日終戦を上海で受け、米国の島々で奴隷として一生を終るか覚悟をしたことがある私共は、八十歳の年も越え今日があることに対し幸と思ひ、余生を送りたいと思ひます。

大正、昭和、平成と世界の変動を一身に受け、この世に生を受けたことを喜びとするところであり「ます」と語り終えられました。

陸軍の暗号兵として

愛知県 加藤 清 高

私は大正十一（一九二二）年四月二十七日、愛知県知多郡鬼崎村（常滑市）に生れた。家族は、父、母、私が長男、弟二人、妹二人の家族で、生れ故郷はのんびりとした半農半漁村で、常滑焼の工場の煙突から吐き出す煙で曇はいつも真黒だった。

そして半田商業学校を卒業して、大阪の朝鮮満州雑貨貿易商に勤務し、昭和十七（一九四二）年三月、徴兵検査で第一乙種合格、同十八年二月に現役入隊することが決まり、社長に退職を申し出た。

「お前は来年兵隊に行くのに何を考えているのだ、この馬鹿者が。退職金はやらぬぞ」と言われたが、「ハイ」結構ですといい、積立金だけ受け取り退社した。それから一人で雑貨商を始めまし